

2. 押型文系土器に伴う石鏃の形態と変遷

—— 樋沢式期を中心に ——

石鏃は縄文時代に普遍的に見られる石器であり、各時期の特徴をもつといわれている。特に縄文時代草創期から早期押型文系土器期については、先学の諸氏により様々な形態が提示され、変遷についても見解が示されている。樋沢遺跡でも第Ⅰ次～第Ⅲ次調査の報告で、樋沢式土器に伴う特徴的な石鏃は局部磨製石鏃、小形の正三角形石鏃であるとの所見が述べられている。今回の調査で石鏃は372点出土し、数的に非常に恵まれた。また、2次堆積ロームにパックされた凹地は出土土器から見ると、縄文時代早期押型文系土器が主体の时期的に限られた土層であり、その中で樋沢式土器が大半を占めることから、石鏃も樋沢式に伴うものと考えられる。そこで石鏃の形態分類を行うことで、改めて樋沢式土器に伴う石鏃の特徴を把握したい。

また、樋沢式期の石鏃形態が、ほかの押型文系土器に伴う石鏃形態とどのような関連性があるのか、先学の研究を参考に表裏縄文土器期までさかのぼり、石鏃形態の特徴と変遷を追う中で、概観してみたい。

(1) 石鏃形態分類と変遷の研究史

石鏃形態分類の研究は古く、明治時代の八木契三郎氏に始まるが、ここでは初めに今日の石鏃形態分類の基礎となっている佐原真氏の研究を振り返り、次に縄文時代草創期から早期にかけての分類・変遷研究を中心に概観する。また該期の石鏃には名称が付けられているものが多く存在するが、統一された認識のもとで使用されているかということには疑問がもたれるところであり、原点に戻る必要性を感じたためになるべく原文を引用することにした。

現在、最も一般的に使用されている佐原真氏（1964. 佐原）の分類は、香川県紫雲出山遺跡の弥生時代石鏃で行ったものである。基部形態の違いで平基・凹基・凸基とし、これをもとに茎の有無を加えて平基無茎式・凹基無茎式などに分類した。その上で凹・平基式群と凸基式群に大別し、それぞれの差を長さ、幅、重さなどの属性から明らかにしている。また近県出土の石鏃の分析も行い、中部瀬戸内地域の弥生時代前期・中期前半の石鏃は、確実な資料が少ないものの凹・平基式群が多いという結果を示している。その後、大方の分類は佐原氏の分類を踏襲しているが、縄文時代早期押型文系土器期は凹基無茎鏃が主体を占めるため、これだけでは特徴をつかむことが困難に感じられる。そこで次に記載する縄文時代草創期から早期押型文系土器期の分類研究が必要になると思われる。

縄文時代草創期から早期にかけての石鏃形態はバラエティーに富み出土量も豊富で、その研究史は古く、形から様々な名称が付けられている。古いところでは八幡一郎氏（1948. 八幡）が岐阜県ひじ山遺跡の石鏃に「鋏形鏃」と名付けた。八幡氏はひじ山遺跡の押型文土器に伴う石鏃には2型式あり、一方を杏仁形、もう一方を鋏形鏃とした。鋏形鏃と呼んだ経緯は本文を引用すると、「……概形三角形の底辺中央部が半円形に抉込まれ、いわば鋏形をなす。……仮に鋏形鏃と名づけよう。厳密には鋤先形とでもすべきであるが、胃の鋏形や、アイヌの鋤先に似た形だから、鋏形の句をとったのである」

ということである。また、香川県小高島貝塚出土の石鏃から、三角形の石鏃と鋏形鏃では三角形の石鏃の方が下層から出土しているとの層位的事例を取り上げ、三角形の石鏃から鋏形鏃へという変遷案も示している。押型文土器との関係にも注目しているが、この時点で土器形式が明確ではなかったことは残念なことである。

その後、樋沢遺跡の第Ⅰ次調査が行われ、戸沢充則氏（1955. 戸沢）が樋沢式土器に伴う石鏃として、局部磨製石鏃をあげている。この調査の際、Dトレンチの層位的事実において樋沢式土器が細久保式土器に先行するとの見解が示された。

1960年代に入り、藤森栄一氏は諏訪市曾根遺跡出土の石鏃を、「長脚鏃」「円脚鏃」「三角鏃」「剥片鏃」と分類した（1960. 藤森）。曾根遺跡で出土している土器は爪形文が主体を占めている。藤森氏はこの中で樋沢遺跡の局部磨製石鏃が、「曾根三角鏃の直接の転化形式」とあり、また細久保A地点出土の中に「樋沢型三角鏃の磨り込みを切り込みにかえたものも考察される」とあり、どの形態の石鏃を考えたかは不明であるが、細久保式期までの変遷を視野に入れていた。樋沢遺跡と関わってくる三角鏃に関する部分を引用すると、「扁平で正三角形、または二等辺三角形の鏃で大型、脚即ち刳込みは全くないか、極めてわずか気持ち刳り込んでいる程度である。尖端の刃部を特に錐状に鋭く造り出しているのが大きな特徴である」としている。

上野佳也氏は、鋏形鏃がほとんど押型文土器に伴い、押型文土器文化の解明に重要な意義をもつものとして注目した（1962. 上野）。上野氏はまず、局部磨製石鏃と挟りが二等辺三角形となる二種類の石鏃と、鋏形鏃が出土している遺跡を比較して、前記の二種類の石鏃と鋏形鏃が共伴していないことを指摘した。そしてそれぞれに伴う押型文土器を検証し、鋏形鏃は楕円文土器と伴っていることを示した。また樋沢遺跡Dトレンチの層位的見解から、楕円文土器に伴う鋏形鏃が、局部磨製石鏃や挟りが二等辺三角形となる石鏃よりも遅い時期に発生したという見解を示した。

立野式土器に伴う石鏃に注目したのは神村透氏で、長野県南信地方の立野式土器の出土する石鏃には「基部の中央、挟入部の中央に最終的な調整剥離を加えてチョコンとした挟りとなっている」という特徴があり、「最適な名称ではないが」と付け加えて「Y字形石鏃」と呼称した（1978. 神村）。神村氏はY字形石鏃が草創期の表裏縄文土器にも多く見られることから、長野県内の草創期から早期の遺跡を中心に、石鏃形態の消長を言及している。Y字形石鏃という名称については、神村氏も適切な名称でないと断っているように、石鏃全体の形状がYの字という印象をもってしまう感もあるが、今回樋沢遺跡の石鏃を分析するにあたり、参考とした部分が多い。

樋沢遺跡の第Ⅰ次～第Ⅲ次調査をまとめた報告書が1987年に刊行された。第Ⅲ次調査報告の中に樋沢式土器に伴う特徴的な石鏃を、「小形正三角形で浅い逆V字状の挟り込み基部の石鏃」とし、局部磨製石鏃も同一グループに含むとの見解が示されている。

この報告書の中で大竹（斎藤）幸恵氏は押型文系土器文化の石器群の変遷と地域的様相をとらえていく上で、該期の遺跡に最も豊富に出土する石鏃に着目した（1987. 斎藤）。そして「石鏃の形式的な変化は、各遺跡に共通して存在する凹基無茎鏃において明確に把握することができる」との見解から、近畿・中部地方24遺跡を対象とし、押型文系土器期の特徴的な石鏃形態である局部磨製石鏃・五角形鏃・鋏形鏃・逆Y字形・先端が錐状に突出する形の5つから検討をしている。ここであげた「逆Y字形」は、神村氏の注目した「Y字形石鏃」のことととらえるが、どこから「逆」という言葉が付いたの

かは資料不足のために判明するに至らなかった。この逆Y字形石鏃の側縁形状が、近畿地方を中心とする五角形鏃（註1）へ、底辺部が中部地方を中心とする局部磨製石鏃に継承されていくなどの変遷案を示し、石鏃形態変遷を地域の特徴まで盛り込んでいる。また樋沢遺跡の局部磨製石鏃や挟りの中央に加えられる弧状の最終剥離のように底辺中央部を中心とする整形の特色は、「樋沢下層、樋沢上層の前後関係をもつ鍬形鏃の逆U字、逆V字の発達した挟りにおきかえられるようにして変遷していくことが認められよう」との所見がある。以上の大竹氏の見解が、今回の樋沢遺跡調査で出土した石鏃を分析する基本となっている。

最近では久保勝正氏が三重県内の9個所の遺跡から出土した石鏃を中心に縄文時代早期の石鏃形態と変遷について検討している（1993. 久保）。久保氏は早期石鏃の様相を把握する鍵となる形態—五角形鏃・鍬形鏃など—をあげ、それらを比較・検討するために側縁、基部、挟りの深さに着目しそれぞれをアルファベットと数字の組み合わせで表している。また大鼻式・大川式・神宮寺式期にかけての形態変遷を追求しているので、久保氏が分類に使用したアルファベットと数字の組み合わせの表示をそのまま引用して、簡単に流れを追ってみる。大鼻式期には五角形鏃が多く、側縁形態A・E類、脚部、挟り2a類が主体であり、大川式期も同様の状況で、大鼻式期・大川式期には形態の保持が安定して見られる。神宮寺式期になると、五角形鏃がほとんどなくなってしまい、1b類が多くなる。神宮寺式期後半になると、鍬形鏃が一定量見られるようになり、属性間のまとまりが崩れ、石鏃の諸特徴により二時期に分けることができそうであるが、資料不足という理由で断定はしていない。このアルファベットと数字の組み合わせは細かい形の差までつかめるが、第三者にはイメージしづらいところもあるように感じられる。

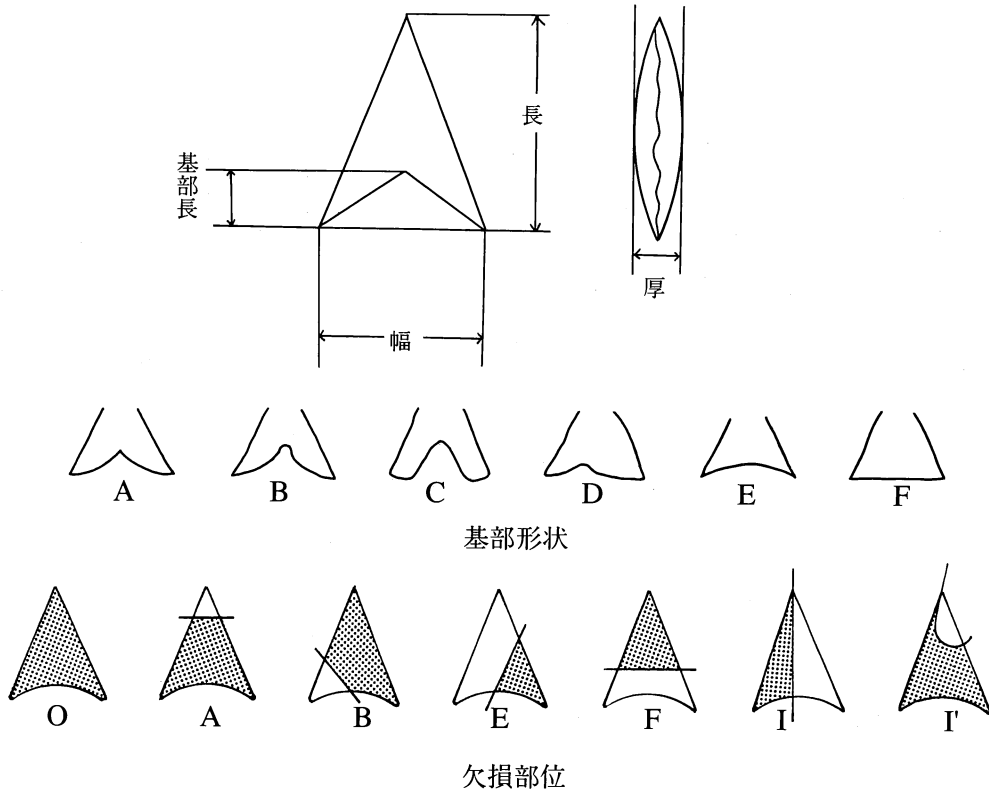
久保氏が行った石鏃の形態をアルファベットなどの組み合わせで詳細を表そうとする試みは、長野県中央道建設に伴う発掘調査の一連の報告書（1976. 小池、1981. 山本、1982. 和田、1982. 小柳）で用いられている。諏訪市十二ノ后遺跡（1976. 小池）で茎の有無、基部形態、側縁形態、先端部形態のそれぞれにアルファベットを付け、その組み合わせで分類を行ったのを始めとし、そのほかの遺跡も時期は縄文時代早期から晩期に至るまで様々であるが、若干手を加えてこれに倣い、分類を試みている。石鏃の細部にわたる細かい分類ではあるが、樋沢遺跡のようにある程度形状にまとまりがある場合には、かえって混乱をきたすと思われ、今回ここでは同じ分類をとらなかった。

以上研究史を振り返って、主に長野県の石鏃形態変遷をまとめてみると、縄文時代草創期には三角鏃、長脚鏃、円脚鏃などが見られ、表裏縄文土器にはY字形石鏃が伴う。このY字形石鏃は立野式期にも認められる。樋沢式期は小形の正三角形石鏃、局部磨製石鏃が特徴的に伴い、細久保式期になると鍬形鏃という変遷をとらえることができる。

(2) 樋沢遺跡第Ⅳ次調査出土石鏃の分析

① 分析の方法

計測点と形状基準 石鏃の計測方法は、第83図に示した。梨久保遺跡の報告書を参考とし、若干の修正を加えている。梨久保遺跡とは時代が異なるため、形態などに違いがあり、そのまま使うことが困難な基部形状については、樋沢遺跡にあてはまるように修正した。以下に簡単に説明を加える。



第83図 石鏃の計測点と形状基準

- A 基部の挟りが逆V字状で、脚部が八の字状を呈する
- B 基部中央の挟りがチョココンとした丸い形で、脚部が八の字状を呈する
- C 基部の挟りが逆U字状で、脚部が幅広く作り出される
- D 基部の挟りが浅く、脚部は左右非対称となる
- E 基部の挟りは浅く弧状を呈する
- F 基部が平ら

なお欠損部位の表示はそのまま使用している。

分類方法 分類の対象としたものは、完形品及び基部形態のわかるもの171点である。今まで樋沢式期には小形の正三角形鏃が伴うといわれているように、形態的特徴をつかむため、まず全体的な形状に注目して大きく分類し、その中で基部の違いや、側縁形状の違いでさらに細分した。ここで行う分類は、あくまでも平面的な「形」である。基部中央にチョココンとした丸い挟りが入るいわゆるY字形石鏃に関しても、この丸い挟りが最終的に挟りを加える技法的なこととの関連もあるが、ここでは形としてとらえたい。

② 分類

第1類 全体形状が正三角形を呈する、従来樋沢式期に特徴的に見られるといわれてきた一群。側縁形状に注目すると21・34・54～56のように外側に湾曲して丸みを帯びているもの、1～3・25・32のように直線的なものなどの相違は見られるものの、ここでは全体の形を重視しているので、同じ分類で扱うこととする。細分するにあたっては、基部形状の相違により細分した。

a種 基部形状Aに属する。基部の挟りが比較的鋭く逆V字状で、脚部は途中ふくらみをもちながら、先端に向かい細くなり開いていく感じの八の字状を呈するもの 44点

6～12は局部磨製石鏃で、これらを含め20点の局部磨製がある。小形で薄い作りが多いが、15～17はほかのものとは比べやや大きめである。

b種 基部形状Bに属する。基部中央の挟りがチョコンとした丸い形、脚部はa種と同一形態の八の字状を呈するもの 37点

30～38は局部磨製石鏃で、これらを含め18点の局部磨製がある。27は先端が突出している。36～38は、丸い挟りを2箇所入れたような形状をしている。26・34の片脚、28・33の両脚のように、脚部の先端が細くならず、少し幅広いものが認められる。

c種 基部の挟りが浅く、弧状となるもの 32点

局部磨製石鏃は53ともう1点ある。57の基部は平らで、わずかな挟りがあるものの平基と分類すべきところであるが、形状が正三角形をしているところから、第5類の平基とは分けて本類に所属させた。55・56は全体的に丸みをもち、挟りも中央に小さく入り、ほかのC種とは若干様相が異なる。

第2類 全体の形状が、左右非対称となるもの。正三角形を基調とするもの、二等辺三角形を基調とするものがあるが、ここでは側縁の形状により2つに細分した。

a種 側縁の両方あるいは一方が内側に湾曲している 14点

正三角形を基調とするものが多く、基部の挟りはほとんどが逆V字状で、脚は八の字状である。58～66は側縁の一方が、67・68は両方が内側に内湾している。局部磨製石鏃は62の1点のみである。70については全面に磨きがあり、局部磨製石鏃とは趣を異にする。66は側縁の調整順序から見て、破損した箇所を再加工しているようである。

b種 側縁の両方あるいは一方が外側に湾曲している 10点

全体的に基部の挟りは比較的浅い。71～75は側縁の一方が外側に湾曲しており、全面に調整をせず自然面を残している。77・78は両方が外側に湾曲し、丸い感じをうける。

第3類 全体の形状は二等辺三角形、正三角形とあるが、基部の挟りが逆U字状を呈し、脚部が幅広く作り出されているもので、いわゆる鍬形鏃を含む。

a種 正三角形を基調とし、脚部は、先端に向かい外に開いていく八の字状に近い形を呈する 18点

81～84は脚全体が外に開き、挟りは比較的浅い。86～89は脚の内側のみが少し外に開いていく八の字状の特徴を残し、挟りが深い。

b種 全体形状が二等辺三角形を呈し、脚部が踏ん張った感じのいわゆる鍬形鏃 9点

92・93・95・96と石材にチャートが多い。

第4類 全体形状が二等辺三角形で、基部は弧状を呈する。第1類～3類とは異質なもの 2点

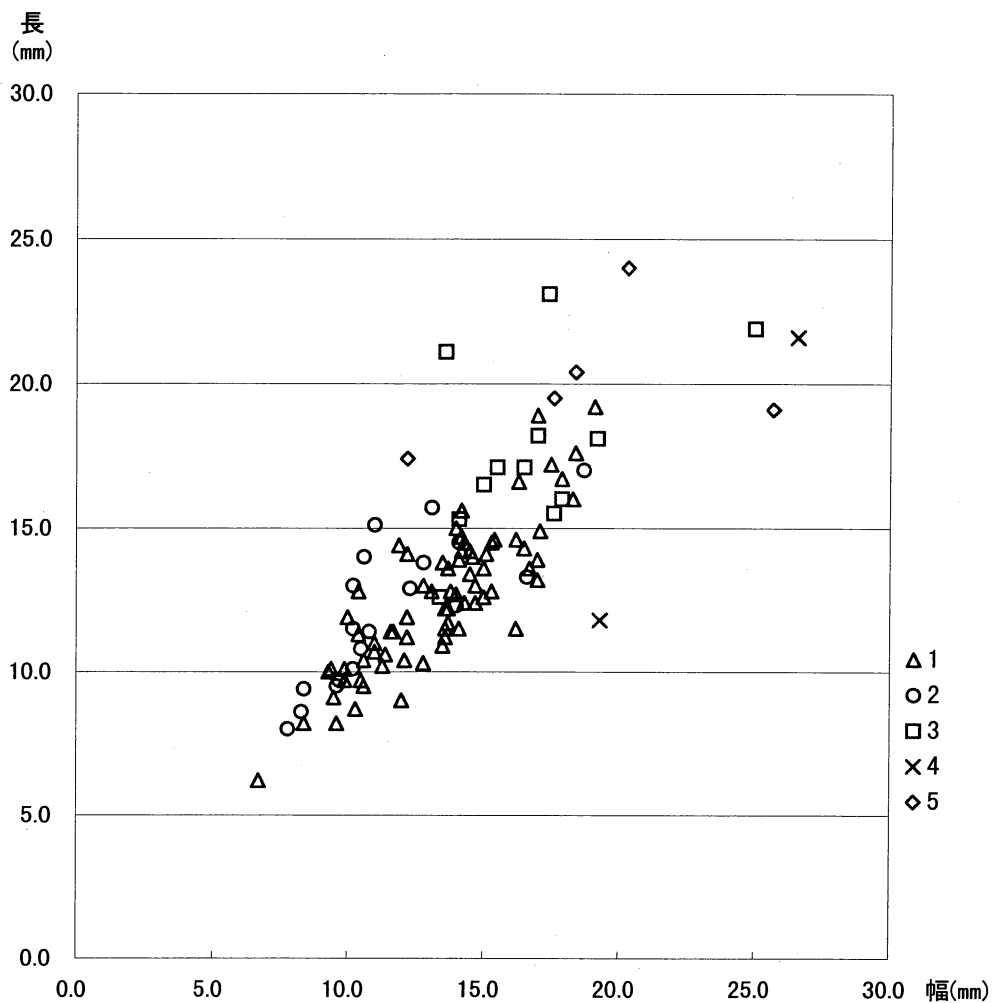
第5類 基部が平らな平基無茎鏃 8点

100・101は形が五角形を呈している。103は磨ってある部分が認められる。

③ 第1類石鏃の検討

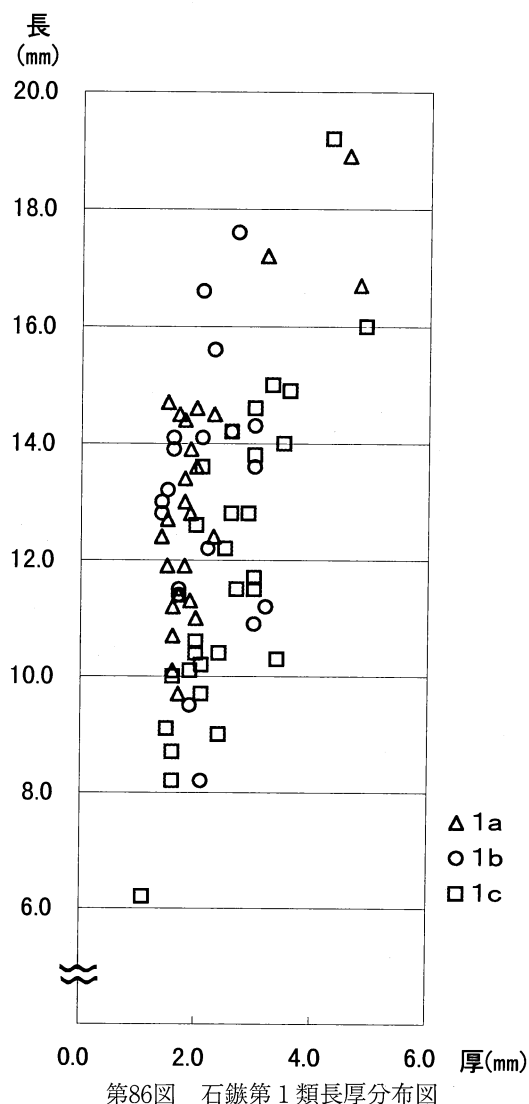
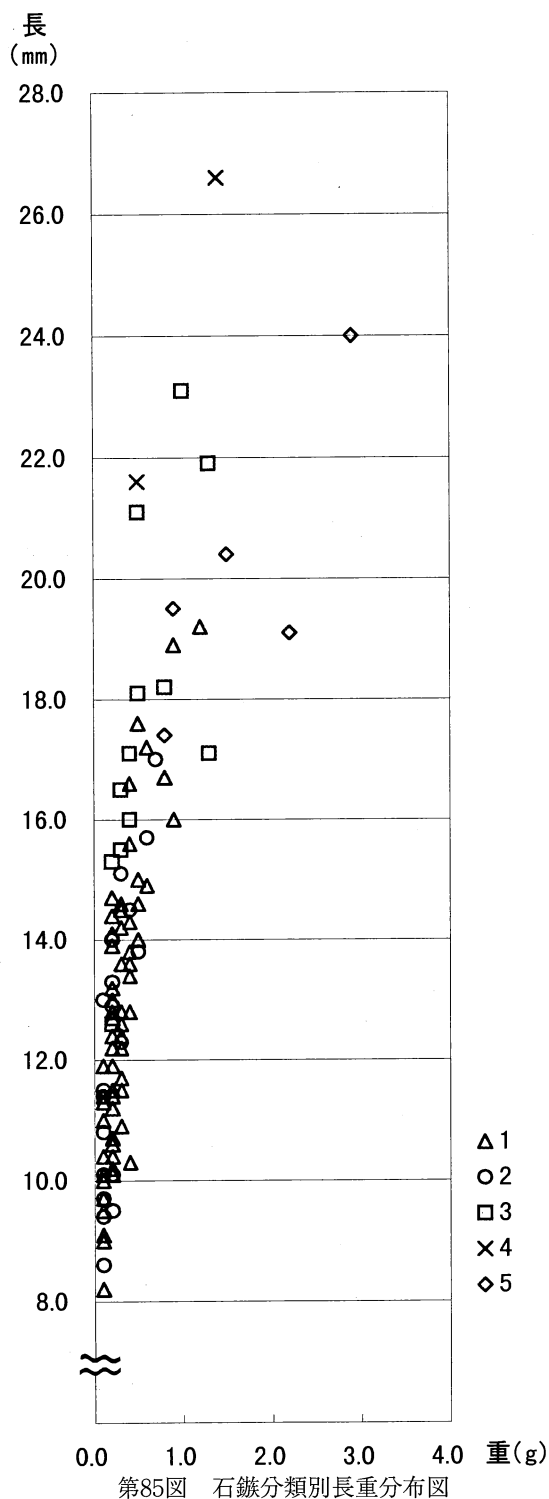
今回の調査で出土した土器の主体を占めるものが、樋沢式土器であるという所見（148頁）より、一緒に出土した石器は樋沢式に伴うものであるといえよう。その見解と上記の分類結果から、第1類とした石鏃が113点と全体の65%を占めていることから、樋沢式土器に特徴的に見られる石鏃形態であることがいえ、その内容を検討してみる。

形状に注目してみると、全体的には長さとの幅の比がほぼ1：1となる正三角形を呈するが、その長さは1.0cm～1.5cm、幅は1.0cm～2.0cmの間に集中していることをみると（第84図）、幾分扁平な形のものもある。重さは1.0g以下に集中し（第85図）、属性から見ても小形の石鏃であることが明らかである。



第84図 石鏃分類別長幅分布図

基部は脚部形状が途中ふくらみをもちながら、先細りして開いていく漢字の「八」の字のような形を呈するものが多い。挟りには比較的鋭い逆V字状を呈するもの（a種）と、基部中央の挟りがチョココンとした丸い形となるもの（b種）が見られる。このa種・b種81点のうち、挟りが逆V字状のa種は54%、中央の挟りがチョココンとした丸い形となるb種は46%とほぼ同じ割合で存在している。また挟りが浅く、基部全体の形状が弧状を呈するもの（c種）もある。挟りの相違と関連して、a種とb種、c種の厚さの違いに注目した（第86図）。a種が厚さ2mm前後に集中し、比較的薄く作られている。基部や厚さの相違は、装着方法の違いと考えられよう。



樋沢式土器に特徴的に伴うといわれてきた局部磨製石鏃は、欠損品を含め86点出土し、分類可能なものはほとんどが第1類に所属する。第1類に分類した40点は、20点がa種、18点がb種で、基部の挟りが浅い弧状をなすc種には2点のみであった。つまり樋沢遺跡では正三角形の脚部が八の字状の形態に対して研磨を行うことが一般的であったといえよう。またa種とb種で局部磨製石鏃が占める割合は、それぞれ41%、45%とほぼ半分である。局部磨製石鏃と磨製ではないものと同じ割合で製作されたのであろうか。

局部磨製石鏃の研磨については向陽台遺跡報告書の中でふれており、それを参考に第1類の40点について研磨の状態を観察した。研磨されている場所は、両面に基部から器面中央にかけて行われているが、片面のみ研磨されているものが1点だけ観察されている。調整と研磨の前後関係を観察すると、基部については研磨後調整を行うものが80%、側縁は調整の前後に行うものが90%以上を占めている。研磨のため器面中央が凹状になっているものがあり、12・31などはこの凹みが深く、凹みが深いほど石鏃全体の厚さは厚い傾向が見られ、ある一定の厚さまで中央部分を薄くするために研磨を行った様子がうかがえる。以上の結果は向陽台遺跡報告書の「ある程度石鏃の形に整えてしまうと、二次調整と研磨を必要に応じて繰り返し、基部中央から器面中央にかけての厚さを加減し、また側縁の形状を整えていることがわかる」との見解(1988.河原)と一致してくる。

以上のことから樋沢式期に伴う石鏃(第1類)の特徴をまとめると、全体形状は小形の正三角形が主体となり、基部は、脚が途中ふくらみをもちながら先細りし開いていき、結果基部形状が「八」の字状を呈するという特徴をもつ。その中に挟りが比較的鋭い逆V字状のもの(a種)と、中央がチョコンとした丸い形のもの(b種)がある。また挟りが浅く、弧状をなすもの(c種)が存在する。そして局部磨製石鏃は、主にa種、b種の中に含まれる。

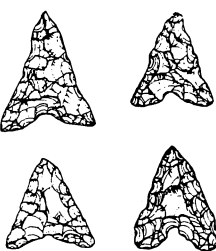
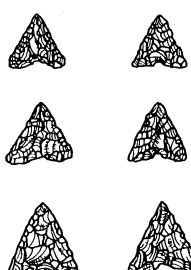
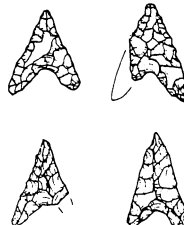
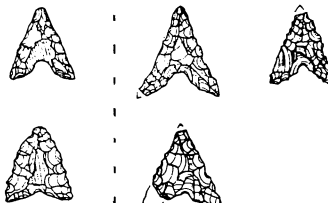
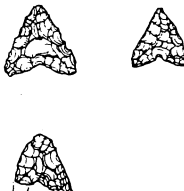
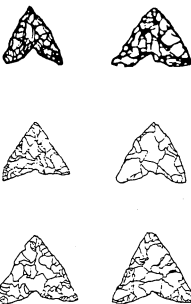
第1類の中で基部の挟りが逆V字状のもの(a種)と、基部中央の挟りがチョコンとした丸い形のもの(b種)とは、ほぼ1:1の同じ割合で存在している。また、a種とb種のそれぞれの中で局部磨製石鏃の比率もほぼ1:1の割合で存在している。この結果が何を意味するのであろうか。

(3) 表裏縄文土器・押型文系土器に伴う石鏃形態の特徴と変遷

樋沢式土器に伴う石鏃形態の特徴は、前項までで見てきたように第I～IV次調査により、かなり確定的になってきたと思われる。その樋沢式期の石鏃形態と、ほかの押型文系土器に伴う石鏃形態との関連はどうであろうか。

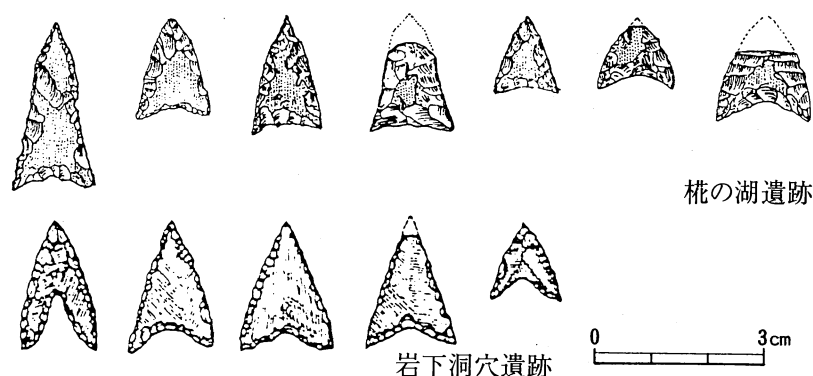
押型文系土器期の石鏃形態の特徴や変遷案は、先に取り上げた先学の研究の中に示されている。それら研究史を念頭におき、改めて長野県を中心とした押型文系土器期の石鏃形態の特徴を検証し、樋沢式期の石鏃形態と比較しながら変遷を追うこととする。そのために、表裏縄文土器、立野式土器、樋沢式土器、細久保式土器を出土する遺跡を取り上げ、石鏃形態の消長を図にした(註2)(第87図)。

なお、表裏縄文土器期までさかのぼる理由については、神村氏や大竹氏の論考を参考とし、基部形状に注目したためである。それは樋沢式土器に伴う石鏃形態の特徴の一つに、基部中央の挟りがチョコンとした丸い形となるものがあることをあげたが、この基部の中央に丸い挟りが入るものは、神村氏によると、表裏縄文から立野式期に多く伴っているとされ(1978.神村)、また大竹氏によると、この基部の特徴は、局部磨製石鏃に継承されていく(1987.斎藤)という見解が述べられていたことによる。

土器形式	形	二等辺三角形		正三角形		
	抉り遺跡	逆V字状	チョコンとした丸い形		チョコンとした丸い形	
表裏縄文土器	お宮の森裏					
	川子石					
立野式土器	美女					
	赤坂					
樋沢式土器	向陽台					
	樋沢					
細久保式土器	西田					

第87図 表裏縄文土器期～細久保式土器期石鏃形態の消長

正三角形		鋏形	
逆V字状	浅い弧状	逆U字状	逆U字状
			
			
			
			
  	  	  	  
   	   	   	   
			   



第88図 縄文時代草創期の磨製石鏃

第87図について若干の説明を加えると、大きくは全体の形状に着目して、二等辺三角形・正三角形・鋏形と分類し、その中を基部の形状で細分した。また、局部磨製石鏃も取り上げたが、表裏縄文土器に伴う磨製の石鏃については第88図に示した。取り上げた遺跡は、両氏の論考を参考に他時期の混在が少ないものを選び、長野県を中心とし、近年の発掘調査で得られた成果と今回の樋沢遺跡調査で出土したものを加えた。近年の資料として、表裏縄文土器の住居址が発見されたお宮の森裏遺跡、立野式期の住居址が発見された美女遺跡、樋沢式期の住居址が発見された向陽台遺跡、また細久保式土器の包含層をもつ西田遺跡の4遺跡を選んだ。

① 表裏縄文土器・押型文土器に伴う石鏃の特徴

第87図に取り上げた遺跡出土の石鏃の特徴を簡単にあげてみる。なお、樋沢遺跡については前項にまとめているのでここでは省くこととする。

表裏縄文土器期のお宮の森裏遺跡25号住居址では37点の石鏃が出土し、そのうち17点が全体の形状が二等辺三角形で脚が外に開く形である。その中でも基部中央にチョコンとした抉りの入るいわゆるY字形石鏃が12点と多数を占めている。また、19号住居址からは51点出土し、25号住居址と同様な傾向が見られるが、正三角形を基調とした比較的抉りの浅いものも目に付く。

曾野川子石遺跡では、縄文時代草創期の遺物が集中して出土する地区から、41点の石鏃が出土し、18点がいわゆるY字形石鏃である。そのうち、全体形状が正三角形のものは12点と、二等辺三角形のものより多数を占めている。

立野式期の美女遺跡住居址出土の石鏃は、全体形状が二等辺三角形で脚が外に開く形が多く、表裏縄文土器期と共通していわゆるY字形石鏃が見られる。正三角形を基調としたY字形石鏃も認められ、局部磨製石鏃が若干ある。

樋沢式期の向陽台遺跡3号住居址で出土した石鏃は10点と数的には少ないが、局部磨製石鏃、小形正三角形の石鏃が出土している。

細久保式期の西田遺跡で対象とした包含層は、縄文時代早期から前期初頭までと時間幅が広く、各期の遺物も相当量出土していることから、単純に細久保式期に伴う石鏃とはいえないが、西田遺跡報告書の中で鋏形鏃としたものを選出した。石鏃の側縁が内側に大きく湾曲しているためか、脚部が

かなり踏ん張った感じをうけるものがある。

ここで局部磨製石鏃の変遷をたどるために、樋沢式期以外で局部磨製石鏃が出土している遺跡を取り上げてみる。局部磨製石鏃は縄文時代草創期から見られるが、この時期は部分磨製石鏃と呼ばれたりしている。岐阜県柵の湖遺跡出土の石鏃（第88図）は、報告書の中に柵の湖Ⅱ式土器に伴っているとの記述がある。柵の湖Ⅱ式土器とは表裏縄文土器で、表裏縄文土器期から研磨を行う石鏃が存在していた。柵の湖では32個の局部磨製石鏃が発見され、その多くがやや厚手の三角鏃に研磨が行われている。研磨されている面は全て平らで、器面中央に小さく研磨するものと両面に長く大きく取るものがある。

樋沢遺跡の局部磨製石鏃との比較をしてみると、研磨が行われる石鏃の形態は、樋沢遺跡は小形の正三角形鏃に、柵の湖遺跡は三角鏃にと、どちらも決められた形のものに研磨をしている様子がうかがえる。研磨の状態を比較すると、樋沢遺跡では凹状の場合が多くを占めるのに対して、柵の湖遺跡では全て平らであるという。これは装着方法の相違によるためであろうか。

立野式期になると美女遺跡で局部磨製石鏃が発見されている。詳しい記載がないため詳細なことは不明である。報告書にある3点の実測図を見ると、研磨されている石鏃の形態には統一性は見られず、研磨の範囲は基部から中央部分にかけて研磨され、柵の湖遺跡のように広く研磨されているものは見られない。どちらかというと樋沢遺跡のものに近い感じをうける。

② 表裏縄文土器期から細久保式土器期までの石鏃形態の変遷

今まで見てきたように、該期に伴う石鏃形態にはそれぞれの時期に特徴が見られ、形態の変遷を追うことができるが、そのまえに今回の樋沢遺跡の調査で出土した石鏃の中に、ほかの押型文土器に伴う石鏃との関連が考えられそうな点があるのでふれておく。

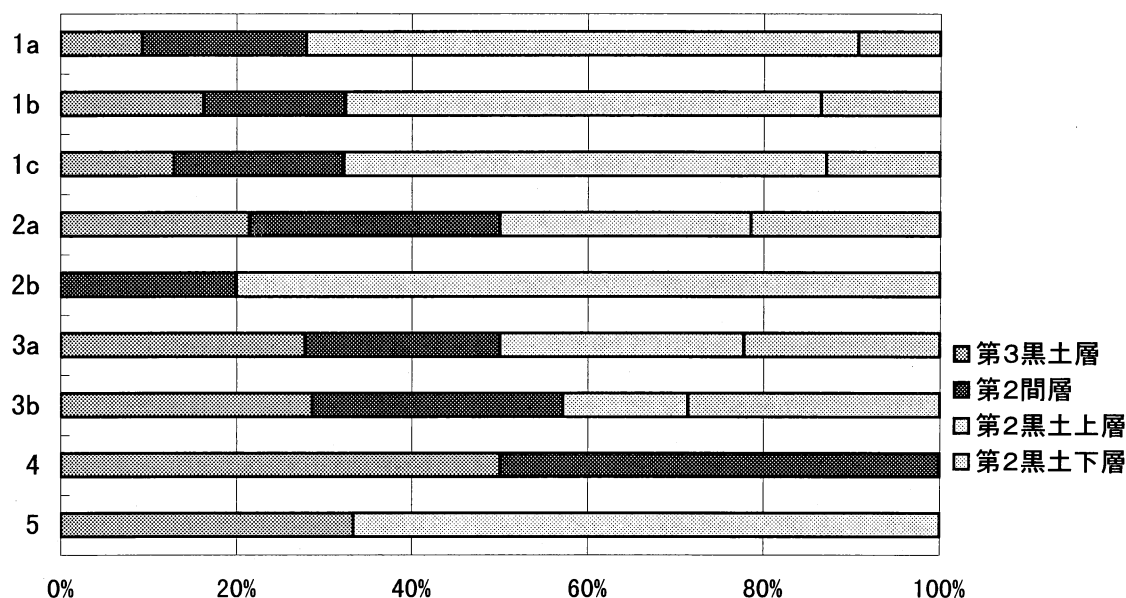
樋沢式期に伴う石鏃の特徴の一つに、脚部が八の字状を呈することをあげた。脚が八の字状に外に開く形態は表裏縄文土器期や立野式期に伴う石鏃にも見られ、表裏縄文土器期や立野式期には脚全体が外に開いていたのが、樋沢式期には脚内側のみが八の字状となり、外側は直線的な形に変化していったととらえることができるのではないだろうか。

基部中央にチョコンとした丸い挟りの入る第1類b種は、表裏縄文期から立野式期の石鏃との関連を考えられることは前述した通りであるが、この第1類b種の中に、脚が先細りしないで幅広く作り出されているもの（33・34）と、挟りを広く作り出そうとしているのか基部の挟りが丸く2箇所入ったようなもの（36～38）があり、鋏形鏃へ移っていく過程と考えたいが、ただ数が少なく確定的ではない。

第3類a種とした石鏃は、鋏形鏃と分類されるものであるが、全体の形状は正三角形を基調としていること、脚部が外に開く八の字状をしていることなどは、樋沢式期に特徴的な第1類の形に近いことから、細久保式期に伴う脚部が踏ん張る感じの鋏形鏃よりは、樋沢式期により近いものととらえた。

このようなことは、共伴する土器型式や層位的出土状況からもいえることが望ましいが、包含層からの出土では困難な状況である。とりあえず第1類～第5類に分類した石鏃の層位別出土状況の割合を見ると（第89図）、第1類は第2黒土層からが多く、第3・4類は上層の第3黒土層の出土が多い。

第1類が土層の非常に安定した第2黒土層から多く出土している傾向は、第1類が樋沢式土器に伴うものであるとの見解をより確実なものにできる。



第89図 石鏃分類別・土層別出土割合

以上のような樋沢遺跡の石鏃の特徴をとらえた上で、先に取り上げた研究史を念頭におくと、石鏃形態の変遷は以下のように理解される。

表裏縄文時期は、二等辺三角形・正三角形を基調とし、基部の中央にチョコンとした袢りの入るいわゆるY字形石鏃が特徴的に見られ、脚部は全体が先端に向かって外側に広がっている。正三角形を基調とするものの中には、基部の袢りが浅いものが見られる。柊の湖遺跡では表裏縄文土器に磨製の石鏃が伴っている。

立野式期も同じような傾向であるが、この時期になると二等辺三角形を基調とした形状の袢りは、深くなる傾向が見られる。美女遺跡を見る限り、局部磨製石鏃も存在するようである。

樋沢式期になると小形の正三角形を主体とした形となるが、基部中央の袢りがチョコンとした丸い形となる特徴は残る。脚部は全体が外に開かず、主に内側のみが開いている八の字状を呈するものが増える。この形態の中に局部磨製石鏃がある。

細久保期には脚が踏ん張る感じのいわゆる鋏形鏃が伴う。この脚が踏ん張る鋏形鏃の前の段階に、樋沢遺跡第3類a種があるととらえる。

(4) ま と め

今回は、先学の研究史をもとに押型文系土器期の石鏃形態の特徴と変遷を、改めて追認する結果となった。

樋沢式期に伴う石鏃形態の特徴が、第Ⅲ次調査報告に指摘されている「小形の正三角形を基調とした逆V字状の浅い袢りをもつもの」であるということは、石鏃の出土数が多かった今回の分類を行った中で第1類が多くを占めていたことで証明されたといえよう。若干付け加えるとすると、基部は

「脚の内側が途中若干ふくらみながら先細りする八の字状を呈する」としたこの脚部にも特徴があると思われる。また小形の正三角形で八の字状の脚部という形を基本として、基部の挟りは逆V字状のものと、中央がチョコンとした丸い形のものの二通りがあるといえよう。また局部磨製石鏃がこの形態の中に含まれることは、ほとんどの局部磨製石鏃が第1類に所属していることから明らかであろう。

表裏縄文土器や押型文系土器に伴う石鏃形態の特徴と変遷は、今回の樋沢遺跡調査で得られた石鏃はもちろんのこと、近年新たに発見された該期の遺跡から出土した石鏃をあわせて、より確定的となったと思われる。その中で樋沢式期の石鏃を中心に考えると、神村氏が指摘したY字形石鏃に鍵があると考えられる。それはY字形石鏃が表裏縄文土器期から立野式期に安定的に見られ、樋沢式期にまでその特徴である基部中央がチョコンとした丸い形となる挟りが、存在するということである。また脚部が外へ開いていく形状も同様であるが、樋沢式期には脚部内側のみになっていくのであろう。大竹氏の指摘する丸い挟りが細久保式期の鍬形鏃へと移っていくという見解は、今回第3類a種と分類した石鏃、つまり全体形状がほぼ正三角形で、挟りは逆U字状をしているが、脚部が八の字状のような形をしている形態の存在から、証明できよう。ただ局部磨製石鏃については、十分な検討を行えなかったが、柊の湖遺跡の磨製石鏃と樋沢遺跡の局部磨製石鏃とは、研磨されている場所の形状などに相違があることはある程度確認できたと思われる。

こうして石鏃の変遷をたどると、表裏縄文土器期から立野式期、そして樋沢式期までの石鏃には類似点が多く、石鏃の形態から見る限り、表裏縄文から立野式、樋沢式へとスムーズに変遷していくことが読み取れる。本報告書中の樋沢式土器の内容（第Ⅲ章4）について検討がされている中で、立野式土器により強いつながりをもつ一群があるとの見解があり、石鏃形態からも基部中央にチョコンとした丸い挟りが入ることや、脚部内側の開き方から立野式期の石鏃と類似した要素をもつものが見られる。

今回は長野県を中心とした限られた遺跡での分析であり、さらに広い範囲での比較が必要であると思われる。また、勉強不足もあり、十分な検討といえるものではないが、戸沢充則調査団長をはじめ、岡本東三氏、神村透氏、河原喜重子氏、大竹幸恵氏、川崎保氏に多大なご教示を賜りここに感謝の意を表したい。

（佐藤美枝子）

註1 今回、樋沢遺跡を中心に考えていたため、主に近畿地方に分布する五角形鏃については名称の経緯などまで追求しなかったことは反省すべき点である。

註2 押型文土器の位置付けについては、ここでは立野式→樋沢式→細久保式の変遷観に従っている。